

# 時代とともに変遷する がんと治療法

知ってトクする 職域がん対策 — vol.9



日本人男性の3人に2人、女性でも2人に1人が、生涯に何らかのがんに罹患します。がんは細胞の老化と言える病気ですから、超高齢社会のフロントランナーである日本が世界トップクラスの「がん大国」になるのは当たり前の話です。

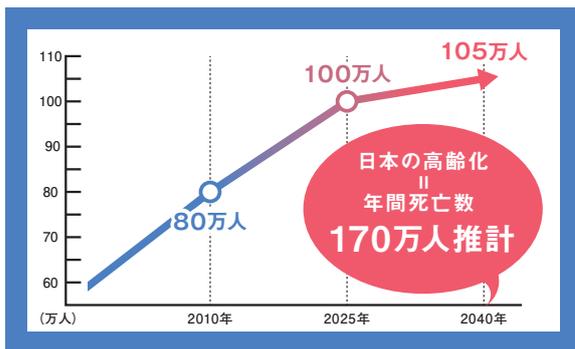
ただ、近代化が早かった欧米と比べて、高齢化のペースがあまりに速く、がんの爆発的な増加に対策が追いつけませんでした。受動喫煙や加熱式たばこへの対応、がん検診受診率の低さ、手術偏重の治療、医療用麻薬の使用量の低さなど、まだまだ問題が山積しています。

しかし、遅ればせながらも、中学・高校で「がん教育」が必修化されたのは、希望の光と言えます。逆に、学校で学べない大人へのがん教育が大きな課題です。子どもにとっての学校は一種の強制力を持つ場所ですが、大人にとっては職場がそれに相当すると言えましょう。学校でのがん教育が始まった今、職域でのがん教育はがん対策推進企業アクションの重要なミッションとなっています。

さて、欧米と違って若い移民を受け入れてこなかったわが国では、高齢者が働く必要があります。働く人にがんが多発する「がん社会」はわが国に特徴的な姿と言えます。男性が55歳までにがんになる確率は5%もありませんから、男性社会で定年が早かった昔の日本の会社とがんとは縁が薄かったわけです。しかし、65歳までの発がんリスクは男性で13%、女性では15%を超えます。年金の支給開始年齢が70歳に引き上げられるのは時間の問題と思いますが、この年齢までにがんになる確率は男女とも2割前後です。皆が70歳まで働くようになれば、働く人の5人に1人が、がん患者となります。

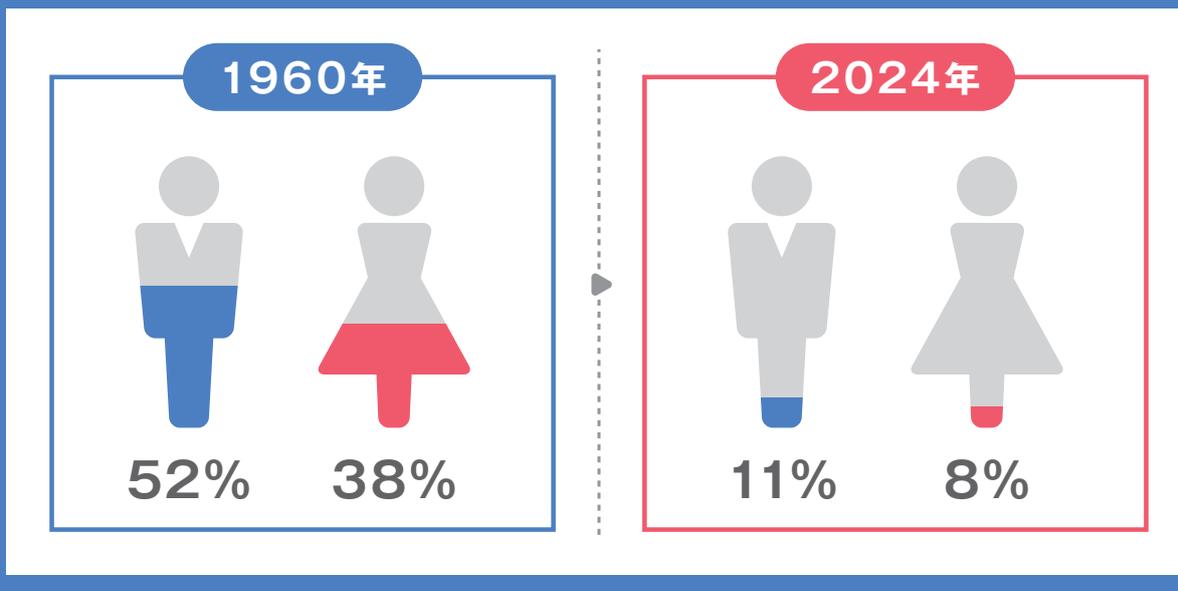
現在、新たにがんと診断される日本人は年間約100万人ですが、がん罹患患者数は2040年ごろに史上最多となり、年間105万人を超えると予想されています。人口減によってがんの候補者は減りますが、それ以上に、高齢化の影響が患者数を増やすのです。

日本人の年間死亡総数も2040年ごろに170万人弱とピークとなります。



がん患者の数だけでなく、がんの種類も時代とともに変化していきます。とくに、かつて日本のがんの代表だった胃がんの減少が顕著です。私が生まれた1960年（昭和35年）、男性のがん死亡の52%、女性でも38%が胃がんによるものでした。それが2024年では、男性で11%、女性で8%まで低下しています。

## 胃がんの死亡率は減少している



免疫系が完成する6歳ごろまでのピロリ菌感染が胃がんの原因のほとんどです。80歳以上では感染率は8割に上りますが、冷蔵庫や水道の普及などにより、20歳以下では5%程度まで低下しています。胃がんは今後も激減していく「絶滅危惧種」と言えます。

胃がんは手術向きのがんの代表で、放射線治療を受ける患者はほとんどいません。しかし、胃がんを除く多くのがんで手術と放射線治療は同じくらいの有効性を持ちますから、2040年に向け、手術は減り、放射線治療は増えることとなります。

がんもその治療法も社会や時代とともに、変化します。企業アクションが発信する最新の情報を活用して下さい。



### 中川 恵一（がん対策推進企業アクションアドバイザーボード議長）

東京大学大学院医学系研究科 総合放射線腫瘍学講座 特任教授、厚生労働省 がん検診のあり方に関する検討会元構成員  
がんの緩和ケアに係る部会座長、文部科学省がん教育のあり方に関する検討会委員など。

東京大学医学部医学科卒業後、東京大学医学部放射線医学教室専任講師、准教授を経て現職。緩和ケア診療部長、放射線治療部門長などを歴任。  
著作には「がんのひみつ」「コロナとがん」などがんに関する著書多数。日本経済新聞でコラム「がん社会を診る」を連載中。



「オトナのがん教育」講座「教えて中川先生!がんって何?がんになっても働けますか?」

好評配信中!